

論 説

日本の家庭医療に期待すること

—林先生からのメッセージ—

北村和也*1, 林 弘道*2

*1 勝川ファミリークリニック

*2 元日間賀診療所所長

はじめに

日本の家庭医療はその誕生から30年以上が経過していますが、いまだに発展途上にあるのが現状です。日本の現状はかつての米国の状況とよく似ていると言われていますが、そのような状況を知る人は我々の中では少ないのではないのでしょうか。そのような中、かつて米国で長年、外科医として働き、自らも家庭医として活躍されてきた林弘道先生から、日本の家庭医療の現状に対するアドバイスを伺うことができました。林先生からのメッセージは家庭医療の発展を目指す私たちにとって極めて重要であると思われまますので、その内容をご報告させていただきます。

北村 最初に林先生の簡単なご経歴を教えてください。

林 私は50年前渡米し、20余年外科専門医として働き、55歳で救急医として10年、家庭医として5年働き、1998年に帰国して、その後愛知県の離島で働き、4年前に引退しました。

北村 先生が米国におられた当時の家庭医療はどうだったのですか。

林 私が開業した1960年代、アメリカの家庭医はG.P. (general practitioner) と呼ばれ、数も少なく、専門制度はありませんでした。これは現在の日本の状態とよく似ていると

思います。その後、30年あまりの間にすばらしい発展を遂げ、現在では米国の医師の30%は、この家庭医です。

北村 先生が見てこられた家庭医療の発展はどのようなものだったのでしょうか。

林 アメリカでは、病院がオープン・システムなので、医師が開業しやすく、私も家庭医と接触することが多かったため、彼らがいかに努力してその地位を確立したかよく知っています。彼らは、生まれたばかりの乳児から、お年寄りが亡くなるまで、男女を問わず診察していました。内科、外科は勿論、小児科、産科、婦人科、精神科など、あらゆる種類の患者を診察し、患者も病気になると、まず自分のかかりつけである家庭医のところへ行き、必要に応じて専門医に紹介されました。この家庭医は、たいいていの医師が医師を志した時になりたいと思ったことがあったと思いますし、今の医学生の大半は将来なりたいと思っている大切な専門医です。アメリカ家庭医学会は、大きな力をもって団結し、その宣伝に努め、魅力ある後期研修制をつくり、またそれに多くの若い医師が応じたのです。家庭医療関係の雑誌はたくさん発行され、病院内のカンファレンスも毎週ありました。そして、広い医学知識と患者をいつ専門的な治療に送る必要であるかを見極める能力を持った

論 説

家庭医がどんどん増えたのです。私のいた町では150人位の医師がいて、50人位が家庭医で、私は5-10人の家庭医から患者を紹介されるようになり、日々忙しく過ごしていました。

北村 先生は日本の家庭医療の現状をどのようにお考えですか。

林 最近、新聞紙上では、小児科医、産婦人科医の不足の声や、患者が大病院の外来を好んで受診するため、医師は過労気味であり、それに伴う医療事故が増えていることなどが論ぜられています。一方で、最近の日医雑誌に掲載された座談会の記事（日本の医師の教育はいかにあるべきか。日本医師会雑誌2006; 135 (3): 537-52.）を読んでもみると、後期臨床研修についての論議で、学生アンケートでほとんどの学生が、幅広い臨床能力とその上に専門性を持つプライマリ・ケアに非常に興味を持っているそうです。しかし、「日本プライマリ・ケア学会、日本家庭医学会と日本総合医療学会で、一緒に特定の専門医制をつくる話があったが、なかなかできない。」「サブスペシャリストは今でもプライマリ・ケア医を一段下に見下す価値観がある。」ということが述べられていました。しかし私は、家庭医は専門医としても質の高い素晴らしい職業だと思っています。決して今回の日医雑誌に書かれているような一段下に見下されるものではありません。今の日本の「かかりつけ医」に、家庭医療専門医の資格を取らせたら、現在の日本の小児科、産婦人科医の不足を補うことも、大病院の医師の過労を少なくすることも、そして医療事故を少なくすることもすぐできるのではないのでしょうか。

北村 これから私たちはどのようなことをすればよいのでしょうか。

林 現在の日本には、アメリカの家庭医学科で経験を積んだり、家庭医療専門医の資格を取った人もいます。そのような人が後期研修の指導にあたり、日本で家庭医を養成してはどうでしょうか。家庭医-総合診療医は今、日本の医学界にとって是非必要な人材なのです。私は名古屋大学総合診療部の伴信太郎教授を知っております。彼は、長年プライマリ・ケアの必要性を強調し、研究も行って、たくさんの家庭医を養成しています。総合医療-家庭医の専門化を“名ばかりの専門医”でなく、“より水準の高い制度化された専門医”を一日も早く確立してもらいたいものです。しかし、これには他の専門医の理解と協力が必要だと思っています。私の知っているところでは、総合診療関係の学会は、日本家庭医療学会のほかに、日本総合診療医学会、日本プライマリ・ケア学会など、いろいろあって、力が分散している様子。これは大変残念なことです。皆さん一つになって、同じ目標に力を合わせてください。心から願います。

北村 本日は貴重なお話をありがとうございました。

連絡先 勝川ファミリークリニック

住所 〒486-0931 春日井市松新町一丁目3226-2
クリニックモール勝川4階

電話番号 0568-35-5580

FAX番号 0568-35-5585

電子メールアドレス kitayann@kachigawa-fcl.jp